

中学生における見捨てられ不安が親密性に与える影響  
—怒りの対処と社会志向性の否定的側面が媒介するの—

窪井昌子<sup>1)</sup>・山口 一<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 児童発達支援室 tomorrow

<sup>2)</sup> 桜美林大学

The Influence of Abandonment Anxiety on Junior High School  
Students' Intimacy:  
Is It Mediated by Coping with Anger and the Negative Aspect of  
Social Orientation?

Masako Kuboi<sup>1)</sup>, Hajime Yamaguchi<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Child Development Support tomorrow

<sup>2)</sup> J.F.Oberlin University

キーワード：見捨てられ不安，中学生，親密性

抄録：本研究では思春期にあたる中学生を対象として、「見捨てられ不安」が怒りの対処や社会志向性の否定的側面を介して親密性に与える影響を検討した。調査は首都圏にある3校の中学校に在籍する男女を対象とし、質問紙法により実施した。質問紙は、年齢、性別を記載したフェイスシート、見捨てられ不安尺度（斎藤ら，2012）、日本版Müller Anger Coping Questionnaire（大竹ら，2000）、個人志向性・社会志向性N尺度（社会志向性N因子）（伊藤，1993）、親密性尺度（谷・原田，2011）とした。結果、680名に調査用紙を配布し、回収されたものは472名（回収率69.4%）、有効回答は433名（有効回答率91.7%）であった。

共分散構造分析によるパス解析を行い「見捨てられ不安」が怒りの対処や社会志向性の否定的側面を介して親密性に影響を与えるというモデルを検証したところ、十分な適合性があるモデルが得られた。それによると、「見捨てられ不安」から直接的に親密性に有意な負のパスが存在するのと同程度に社会志向性の否定的側面を介して親密性に至る有意な負のパスが存在することが明らかになった。また、パス係数は低い値であるが、「見捨てられ不安」が怒りを表出したことに対する罪悪感を介して親密性に至る有意な正のパスが存在した。この結果から、自己に対する否定的な思い込みを改善するような援助や、怒りを表出したのち、その罪悪感をどの

ように親密な対人関係を構築することに繋げるのかを一緒に考えることが有効と考えられた。

## 1. 問題の背景と所在

### 1.1 問題の所在

中学時代は、心と体に急激な変化が訪れる思春期にあたり、Blos (1962) は“親から心理的に離れ、自立して個を確立し、内在化した幼児対象からの独立を目指す時期である”としている。また、“思春期を迎えた子どもは、これまで当然あった親への依存状態との違いに戸惑い、自立しようとしながらも内心には心細さを抱えてもいる”と述べている。この時期にある若者は大人と子どもの狭間で揺れ動く思春期心性を持つことがうかがえる。第二の分離個体化期 (Blos, 1962) であるこの時期は、親から分離することによる「見捨てられ不安」を再体験する時期でもある。佐々木・小川 (1994) は、“現代の価値観は多様化しており、あらゆるものが曖昧であり、一貫性がなくなってきている現代の社会では、思春期・青年期の若者は、生きづらさを感じている。彼らは安定した対象と関わる機会逃し、自己の安定を得ることができず、絶えず周りから見捨てられるのではないかという不安の中で生活することを強いられている”と述べている。この絶えず見捨てられるのではないかという不安の中で揺れ動く思春期心性は友人関係にも影響を及ぼし、安定した関係を保つことが難しかったり、恋愛においても失恋という大きな痛手を負うことを経験して、自分の無力感と孤独感、空虚感、怒りを味わったりしてしまうことになるのではないだろうか。佐々木・小川 (1994) も“思春期・青年期は、自己を見出し、家族から自立することを課せられ、現実の生活の中でも重要な喪失体験を経験しなければならないのである”と述べている。

塩見 (2000) は、青年期の課題である自己の形成をもたらすものについて、“自分らしさを大切に、それを打ち出していくことと、自分とは異なる考えや感情を持つ他者を受け入れていくことのどちらも自己の形成において欠くことができないもの”と述べている。そのバランスをとることは難しく、青年期にあるものはその葛藤の中でもがいている。この自分もしくは他者のどちらか一方に偏ることなく自分の気持ちや考えを言葉で表し、相手の発言も受けとめる対人関係のあり方は、思春期においても、重要な発達課題の一つと考えられる。

先に述べたように、思春期は第二の分離個体化期であることから、「見捨てられ不安」を再体験する時期である。「見捨てられ不安」は自己の内面だけで成立するものではなく、対人関係の中で成立するものである。また逆に、「見捨てられ不安」は対人関係に影響を及ぼすと考えられる。例えば、思春期に「見捨てられ不安」を再体験することで、自分が他者から認められていないという不安と、自分自身への自信喪失を引き起こされることが考えられる。この不安定な思春期の心が、卑屈になったり攻撃的になったりという形で表出し、親密な友人関係が築けないことにつながるのではないだろうか。

そこで本研究では、中学生の「見捨てられ不安」が対人関係にとって重要な役割を果たす親密性にどのような影響を及ぼすかについて検討する。

## 1.2 見捨てられ不安

「見捨てられ不安」は、文字通り他者に見捨てられる不安をさすが、Masterson (1972) が境界性パーソナリティ障害の患者の心性を表すために使用を始めて以降、広く用いられるようになった。Masterson (1972) によると、「見捨てられ不安」は人間関係に対する慢性的な不安や喪失感であり、乳幼児期に密着した関係を築くことができず、特に母親からの愛情を受けられなかった場合に起きる。そして、第二の分離固体化期といわれる思春期に、「見捨てられ不安」を再体験するのである。さらにMasterson (1972) は「見捨てられ不安」は一つの感情からではなく、抑うつ、怒りと憤怒、恐れ、罪責感、受動性と孤立無援感、空しさと空虚感の6成分から成立する」と述べている。そして、“この「見捨てられ不安」の感情は、自分の無力感と孤独感、空虚感、怒りなどによって、対人心性に影響を与え、安定した対人関係が保たれることを難しくしている”とも述べている。

## 1.3 親密性

Erikson (1959, 1968) は、“真の親密性が可能になるのは、適切な同一性の感覚が形成された後だけである”と述べている。これは、青年期には自我同一性対同一性拡散という発達課題があり、青年期に自我同一性を確立した者は、成人期には自分を見失うことなく他者との親密な関係を形成することができるということである。またErikson (1959) は、“他人たちと本物のかかわり合いを結ぶことは、確固たる自己確立の結果であると同時に自己確立の試練でもある”と述べている。しっかりとした同一性の感覚が得られていない場合には、親密性を築くことが困難であることを指摘している。その上で、Erikson (1959, 1968) は、“同一性の感覚が得られていない状態で、人とかかわり合いを結ぼうとする時に、ある種の緊張を経験する”と指摘する。これは、他人とかかわり合うことに気がつかったり、控えざるを得なくなってしまうたりする、ということである。以上のことは、自我同一性確立の前段階にある思春期の友人関係において起こりがちなことだと思われる。

## 1.4 怒りの対処

「見捨てられ不安」を処理する方法の一つである怒りと憤怒に焦点を当てて、対人関係にどのような影響を与えるかを調べてみると、木野 (2004) は、“怒りは一般的に否定的な対人感情として扱われることが多く、対人場面での怒りの表出は一般に抑制される傾向にある。これは怒りの表出が相手にはより攻撃的に捉えられやすく (Averill, 1982)、対人的に否定的な結果が予想されることなどによるもの”と述べている。

思春期心性と友人関係について、柴橋 (2004) は“男子では力、支配が重要な意味を持ち、ライバル意識を強く持ちながら自立した付き合いが多いこと、女子では関係性の維持に気を遣い、情緒的な共有を求める交流が中心にあり、その背景で友人からどう思われるかという不安・懸念を強く感じていることが示されている (Buhrmester, 1996; 落合・佐藤, 1996; 榎本, 1999)”と述べている。また、柴橋 (2004) は“思春期の女子の相手に合わせようとする傾向は、自分の

欲求を主張せず抑制する。そして思春期の男子の特徴の一つとしては、相手への不満を表明するものの、自分への抗議や独自の意見を受け止めようとしない背景に、相手のことを考えず、自分を押し通そうとするやや攻撃的な感情がある”と述べている。以上のことから思春期においては、自分の気持ちを主張することが怒りの表出へと変化しやすい状況にある。また、怒りを攻撃的に表出したり、逆に友人関係の維持に敏感になり、怒りを抑えてしまうことも考えられる。一方、怒りを上手く主張することは自分も相手も大切にしたい自己表現であり、良い友人関係が築けることに繋がると考えられ、怒りの対処が思春期においては重要なことがわかる。

## 1.5 社会志向性の否定的側面

伊藤 (1993) は、個人志向性の否定的側面と社会志向性の否定的側面を研究し、「個人志向性・社会志向性N尺度」を発表した。そのなかで伊藤 (1993) は社会志向性を“意識が他者や社会との関係性に向かい、他者との共存や社会適合を志向する傾向”と定義した。そして、社会志向性の否定的側面を、“未熟で一方的な依存や、自我の強さに裏づけされない他者への追従、自分を殺してまでの過剰適応などのことである”と論述した。

木野 (2004) は、大学生を対象にこの尺度を用いて、「怒りの抑制」、「怒りの主張」と「個人志向性・社会志向性N尺度 (社会志向性N因子)」(以下「社会志向性N」と記載)との関係を調べ、「怒りの抑制」は「社会志向性N」に中程度の正の相関関係があり ( $r = .41, p < .001$ )、「怒りの主張」は弱い負の相関関係がある ( $r = -.29, p < .01$ ) ことを明らかにした。また、個人志向性の肯定的側面、社会志向性の肯定的側面との関係も調べ、「怒り主張」は個人志向性の肯定的側面、社会志向性の肯定的側面に弱い正の相関関係があり、「怒り抑制」は個人志向性の肯定的側面に弱い負の相関関係があることを明らかにした。木野 (2004) は“怒りを適切に主張することは、個人を尊重し主体的に行動するとともに、他者との共存や社会的な適応を志向する傾向が高く、個性化においても社会化においてもより成熟した状態にある”と述べている。

また、Bowlby (1969) は、“幼少期に母親との間で「見捨てられ不安」が強い場合は、自分は受け入れてもらうことができない価値のない存在である、相手は自分を愛していないとして自分の存在を否定的に認知するようになる。さらに、母親以外の他者との関わりを持つとすると、自他に対する不信感が強くなり親密な関係を回避するようになる”と述べている。

上記の1.1～1.5で述べたことをまとめると、「見捨てられ不安」から起こる怒りの対処は親密性に負の影響を及ぼすと考えられ、また、同様に「見捨てられ不安」から生ずる社会志向性の否定的側面も親密性に負の影響を与えていると考えられる。結果、「見捨てられ不安」は思春期の親密な対人関係に負の影響を与えると考えられる。

## 2. 目的

第二の分離個体化期と言われる思春期は「見捨てられ不安」が再体験される時期であり、それが思春期の対人関係に影響を及ぼすと考えられる。本研究では、思春期にあたる中学生を対象として、対人関係を築く上で重要な他者との親密性に、「見捨てられ不安」が影響を及ぼして

いるかを調査する。また、その影響には、社会志向性の否定的側面や怒りの対処が媒介しているのかを調査する。これらの点が解明されることで、対人関係の改善や円滑化のための方策、ひいては充実した中学校生活を送れるための方策について示唆が得られると思われる。

### 3. 方法と手順

#### 3.1 調査対象者と調査時期

首都圏にある3校の中学校に在籍する生徒を対象とした。桜美林大学研究倫理委員会の承認(2016年4月承認, 受付番号15049)後, 2016年6月～9月の期間に調査を実施した。

#### 3.2 調査方法

質問紙調査を行うこととした。調査の実施に同意が得られた中学校において担任教員が、調査協力の依頼文と同意書ならびに質問紙を封筒に入れて対象者に一部ずつ配布し、質問紙に関する説明(調査の趣旨, 目的, 対象, 調査方法, プライバシー保護, 調査拒否の自由, および調査を拒否した際, 不利益な対応を受けないなどについて)を行った。その後家庭に持ち帰ってもらい、保護者の同意が得られた生徒に回答してもらうこととした。翌週, 担任教員が回収したのち, 調査実施者が質問紙を受け取った。

#### 3.3 質問紙の構成

##### (1) フェイスシート

学年差および性差を確認するため, 学年, 性別の記入を求める構成とした。

##### (2) 見捨てられ不安

斎藤・吉森・守谷・吉田・小野(2012)によって作成された見捨てられ不安尺度を用いた。第一因子注目・承認欲求8項目と第二因子過剰な自己犠牲7項目の2因子15項目で構成されている。この尺度は青年期を対象にして作成されたもので, 現代の若者の日常を反映しているため採用したが, 第一因子の注目・承認欲求の項目の中に, 携帯電話に関する3項目があることに関して, 携帯電話を持っていない中学生もおり, 適切でないとの指摘を中学校側から受けたため削除した。そのためそれ以外の12項目を用いた。「まったく経験がない」(1点)～「よくやっている」(5点)の5件法にて回答を求めた。

##### (3) 怒りの対処

大竹・島井・曾我・宇津木・山崎ら(2000)によって作成された日本版Müller Anger Coping Questionnaireを用いた。第一因子「怒り表出」7項目, 第二因子「怒り抑制」6項目, 第三因子「罪悪感」6項目, 第四因子「怒り主張」4項目の4因子23項目で構成され, 怒りの対処を総合的に測定するものである。第三因子の「罪悪感」の項目の中で, 怒りの表出に対する罪悪感と関係がない2項目は今回の調査では用いないこととし, 21項目を用いた。なお, 罪悪感には怒りに対する罪悪感のみを抽出して構成したため, 以下「怒り罪悪感」とした。「まったくない」(0点)～「ほとんどいつもそうだ」(3点)の4件法にて回答を求めた。

#### (4) 社会志向性の否定的側面

伊藤（1993）によって作成された「個人志向性・社会志向性N尺度」を用いた。個人志向性の否定的側面をとらえる第一因子と、社会志向性の否定的側面をとらえる第二因子から構成されているが、今回は対人関係に影響の強い社会志向性の否定的側面を測定する因子である第二因子の7項目を使用し、「あてはまらない」（1点）～「あてはまる」（5点）の5件法で回答を求めた。

#### (5) 親密性

谷・原田（2011）によって作成された親密性尺度を用いた。1因子構造の10項目を「まったくあてはまらない」（1点）～「ひじょうにあてはまる」（7点）の7件法で回答を求めた。

### 3.4 分析方法

分析にはSPSSver23.0を使用した。

分析方法は以下の通りである。

- (1) 見捨てられ不安尺度は全15項目のうち、3項目を削除したため、尺度構成に変更はないか12項目で因子分析を行った。
- (2) 日本版Müller Anger Coping Questionnaireは全23項目のうち、下位尺度「罪悪感」で怒りの表出に対する罪悪感に関係のない2項目を削除したため、4因子構造に変更はないか21項目で因子分析を行った。
- (3) 個人志向性・社会志向性N尺度は第二因子の社会志向性N因子のみを用いたため、尺度構成に変更はないか因子分析を行った。
- (4) 親密性尺度は1次元構造の尺度構成に変更はないか因子分析を行った。
- (5) それぞれの尺度において、性差と学年差を検討するため、一元配置の分散分析を行った。
- (6) 尺度間の相関分析を行った。
- (7) 独立変数の「見捨てられ不安」が怒りの対処と社会志向性の否定的側面を介して、従属変数の「親密性」に影響を及ぼすことを仮定したパス図の妥当性を検証するために共分散構造分析を行った。

## 4. 結果

### 4.1 分析対象者

1年生から3年生まで全学年の男女中学生680名に調査用紙を配布し、回収されたものは472名（回収率69.4%）であった。欠損値があるものなどを除き、433名の調査用紙を分析の対象とした（有効回答率91.7%）。分析対象者の内訳は、男性50名（11.5%）、女性383名（88.5%）であった（表1）。今回は女性が多く男性は少数に留まったため、性差の検討は行わなかった。

表 1 分析対象者の学年別、男女別人数

	中学1年生	中学2年生	中学3年生	合計
男	22	17	11	50
女	109	129	145	383
合計	131	146	156	433

## 4.2 因子分析

### 4.2.1 見捨てられ不安尺度

見捨てられ不安尺度(齋藤ら, 2012)のうち, 携帯電話に関する3項目を削除した12項目について, まず各項目の平均値と標準偏差を算出し, 得点分布を確認したところ, フロア効果が認められた2つの項目を除外した。次に, 残った10項目に対して最尤法による因子分析を行った。元の見捨てられ不安尺度は第一因子注目・承認欲求と第二因子過剰な自己犠牲の2因子で構成されているが, スクリーンプロットの結果から1因子構造が妥当と考えられた。その後, 固有値.35以上を基準として項目の取捨選択を行った結果, 8項目からなる尺度となった。この尺度は元の尺度名と同様に見捨てられ不安尺度とした。 $\alpha$ 係数は.81であり, 十分な信頼性が確認された。累積寄与率は36.42%であった(表2)。

表 2 見捨てられ不安の因子分析結果

質問項目	F 1
8. 自分が誘われてない集まりがあると, 嫌われているのではないかと不安になる	.75
10. まわりに良く思われたために「いい人」を演じてしまう	.69
4. 自分の振る舞いが友人から変に思われないか, 気にしている	.69
9. 友人が不機嫌そうなときは, 自分が原因ではないかと不安になる	.66
2. まわりにどう思われているか気にして, 本当の自分を出せずにいる	.64
7. 自分の嫌いな人にも嫌われたくないと思う	.47
12. 自分のスケジュールを犠牲にしても, 他人からの新しい依頼を断れない	.41
11. 本当は好きな友人でも, 周囲がその友人の悪口を言っていたら, 一緒になって悪口を言うってしまう	.39
$\alpha$ 係数 .81	累積寄与率 36.42%

### 4.2.2 日本版Müller Anger Coping Questionnaire

日本版Müller Anger Coping Questionnaire(大竹ら, 2000)のうち, 怒りの対処に関係のない2項目を削除した21項目について平均値と標準偏差を算出し, 得点分布を確認したところ, フロア効果が認められたため, 1項目を除外した。残りの20項目に対して最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。そして, 固有値.35以上を基準として項目の取捨選択を行った結果, 19項目からなる尺度となった。スクリーンプロットの結果と内容的妥当性から「怒り抑制」, 「怒り表出」, 「怒り罪悪感」, 「怒り主張」の4因子構造が妥当であると判断された。各因子の $\alpha$ 係数は, 「怒り抑制」.79, 「怒り表出」.80, 「怒り罪悪感」.75, 「怒り主張」.80であり, 十分な信頼性が確認された。累積寄与率は45.23%であった(表3)。

表 3 日本版Müller Anger Coping Questionnaireの因子分析結果

質問項目	F1	F2	F3	F4
＜第一因子 怒りの抑制＞				
9 頭にくることがあっても、怒りを表さないようにしている	<b>.81</b>	-.08	-.08	-.04
11 他人よりも怒りすぎないようにしている	<b>.74</b>	.32	.00	.07
8 嫌な人だと思われたくないので、腹を立てていることを言わない	<b>.62</b>	.06	.03	.11
10 腹を立てていることが多いが人は気づいていないと思う	<b>.61</b>	.07	-.10	.02
20 腹を立ててしまうことがあるが抑えようと思っている	<b>.51</b>	-.02	.17	.05
13 人に敵意を持つことがあっても、表さないようにしている	<b>.49</b>	.02	.01	.09
＜第二因子 怒りの表出＞				
3 怒ったときにはドアをバタンと閉める	-.02	<b>.73</b>	-.05	-.03
18 カットすると物にあたる	.02	<b>.72</b>	-.01	-.09
1 机や物をたたいて怒りを表す	.03	<b>.67</b>	-.10	-.07
14 頭にくると言葉が悪くなる	.08	<b>.59</b>	-.05	.09
16 腹を立てるとひどいことを言う	-.03	<b>.56</b>	.18	.06
5 怒ると声が大きくなる	-.04	<b>.50</b>	.12	-.09
＜第三因子 怒り罪悪感＞				
15 怒りを表出すると罪悪感を感じる	.03	-.08	<b>.74</b>	-.09
6 怒りを爆発させると後で悔む	-.04	.02	<b>.71</b>	.04
17 カッしていた時に考えたことを後で思うと恥ずかしい	.01	.05	<b>.60</b>	.02
4 怒りを表したことをよくないことだと感じる	.05	.	<b>.59</b>	-.02
＜第四因子 怒りの主張＞				
12 誰かに腹を立てたらその人に自分の気持ちを伝える	.09	-.02	-.07	<b>.79</b>
2 誰かに腹を立てたらその人に伝えることができる	-.03	.03	-.01	<b>.77</b>
19 誰かに腹を立てたらそのことをその人に言うことができる	-.02	-.03	.04	<b>.74</b>
$\alpha$ 係数	.79	.80	.75	.80
		累積寄与率 45.23%		

#### 4.2.3 個人志向性・社会志向性N尺度 (社会志向性N因子)

「個人志向性・社会志向性N尺度 (社会志向性N因子)」(伊藤, 1993) 全7項目の平均値と標準偏差を算出し、得点分布を確認したところ、天井効果とフロア効果は認められなかったため、この7項目を、最尤法を用いて因子分析を行った。その結果、1因子構造が妥当と判断され、固有値.35以上を基準として項目の取捨選択を行った結果、6項目が見出された。 $\alpha$ 係数は.78で

あり、十分な信頼性が確認された。累積寄与率は37.19%であった(表4)。

表4 社会志向性N尺度の因子分析結果

質問項目	F 1
6. 人の目ばかり気にして、自分を失いそうになることがある	.67
5. 相手の顔色をうかがうことがある	.64
3. 人前では見せかけの自分をつくってしまう	.62
4. 何か良くないことがあると、すぐ自分のせいだと考えてしまう	.61
1. 何かを決める場合、周りの人に合わせることが多い	.58
2. 人の先頭に立つより、多少我慢してでも相手に従うほうだ	.52
$\alpha$ 係数 .78	累積寄与率 37.19%

#### 4.2.4 親密性尺度

親密性尺度(谷ら, 2011)全10項目について平均値と標準偏差を算出し、得点分布を確認したところ、フロア効果は認められなかったが、天井効果が4項目において認められた。しかし、内容的妥当性を考慮して除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした。その結果、1因子構造が確認され固有値.35以上を基準として項目の取捨選択を行った結果、8項目が見出された。 $\alpha$ 係数は.89であり、十分な信頼性が確認された。累積寄与率は52.43%であった(表5)。

表5 親密性尺度の因子分析結果

質問項目	F 1
2. 自分が困った時に相談できて、相手が困った時に相談にのれる人間関係がある	.93
1. お互いに信頼し、心を打ち明けることのできる相手がいる	.93
3. 自分を支えてくれる相手がいれば、自分も必要な時に相手の支えになることができる	.90
4. 親しい人という時に、お互いが満足し合える関係にある	.83
6. お互いある程度犠牲を払ってでも助け合えるような人間関係がある	.61
7. 人と表面的な付き合いしかできない*	.51
5. 人との付き合いは形式的なもので、自分は本当は孤独だと感じる*	.45
8. 自分を見失いそうで、人を愛することができない*	.37
$\alpha$ 係数 .89	累積寄与率 52.43%

\*は逆転項目を示す

#### 4.3 学年差の検討

中学生における学年別の差について一元配置の分散分析を行った結果を表6に示した。「見捨てられ不安」、「怒り表出」、「社会志向性N」において有意な差が見られた(「見捨てられ不安」: $F(2, 430) = 3.67$ , 「怒り表出」: $F(2, 430) = 5.49$ , 「社会志向性N」: $F(2, 430) = 8.15$ , いずれも $p < .05$ )。多重比較の結果、「見捨てられ不安」、「怒り表出」では、2年生よりも3年生の方が有意に高く、「社会志向性N」は2年生よりも1年生、1年生よりも3年生の方が有意に高い結果となった。

表6 各因子の学年別得点と分散分析結果

	中学1年生	中学2年生	中学3年生	F値	多重比較の結果
見捨てられ不安	2.73 (.81)	2.68 (.81)	2.91 (.81)	3.67*	3>2
怒り抑制	1.26 (.68)	1.40 (.71)	1.30 (.72)	1.46	
怒り表出	1.26 (.74)	1.14 (.65)	1.41 (.70)	5.49*	3>2
怒り罪悪感	1.28 (.68)	1.22 (.71)	1.28 (.72)	0.25	
怒り主張	1.06 (.84)	1.00 (.77)	0.98 (.82)	0.28	
社会志向性N	3.04 (.80)	2.89 (.82)	3.27 (.82)	8.15*	3>1>2
親密性	5.47 (1.15)	5.25 (1.20)	5.20 (1.18)	2.11	

\* $p < .05$

注) カッコ内は標準偏差

#### 4.4 尺度間の相関

見捨てられ不安尺度、日本版Müller Anger Coping Questionnaireの各因子、「社会志向性N」、親密性尺度間の相関を算出した(表7)。その結果、「見捨てられ不安」と「社会志向性N」との間に有意な正の中程度の相関を示した( $r=.55, p < .01$ )。また、「見捨てられ不安」と「親密性」に有意な負の弱い相関を示した( $r=-.23, p < .01$ )。そして「怒り抑制」、「怒り罪悪感」にそれぞれ有意な正の弱い相関を示した( $r=.22, r=.21, p < .01$ )。「社会志向性N」と「親密性」との間に有意な負の弱い相関を示した( $r=-.28, p < .01$ )。怒りの因子間の相関を見てみると、「怒り抑制」と「怒り罪悪感」( $r=.24, p < .01$ )、「怒り表出」と「怒り罪悪感」( $r=.21, p < .01$ )、「怒り表出」と「怒り主張」( $r=.26, p < .01$ )とにそれぞれ有意な正の弱い相関を示した。また、「怒り主張」と「怒り抑制」に( $r=-.19, p < .01$ )に有意な弱い負の相関が示された(表7)。

表7 各変数間の相関

	見捨てられ不安	怒り抑制	怒り表出	怒り罪悪感	怒り主張	社会志向性N	親密性
1. 見捨てられ不安	—	.22**	.17**	.21**	-.06	.55**	-.23**
2. 怒り抑制		—	-.11*	.24**	-.19**	.09	.03
3. 怒り表出			—	.21**	.26**	.15**	-.03
4. 怒り罪悪感				—	.02	.15**	.07
5. 怒り主張					—	-.12*	.04
6. 社会志向性N						—	-.28**
7. 親密性							—

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

#### 4.5 共分散構造分析による因果モデル

「見捨てられ不安」が怒りの対処4因子「怒り表出」、「怒り抑制」、「怒り罪悪感」、「怒り主張」と「社会志向性N」を介して「親密性」に至るパスが存在するのかを検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。結果を図1に示す。最終的な適合度指標は、 $\chi^2 = 4$ ,  $df = 5$ , RMR .013, GFI .997, AGFI .987, RMSEA .000, と十分な適合性があることが確認された。

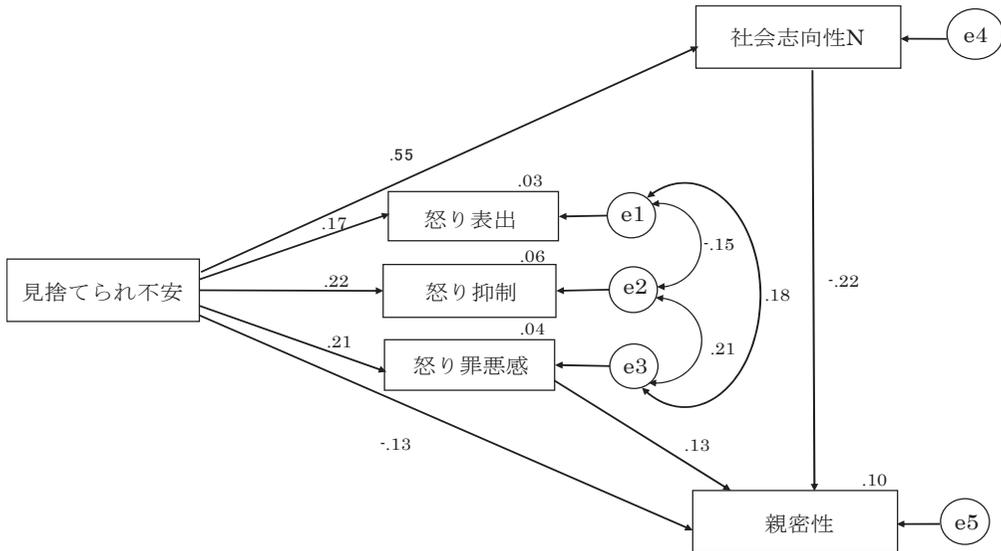


図1 「見捨てられ不安」が「怒り」や「社会志向性の否定的側面」を介して「親密性」に影響を与えるパス図

### 5. 考察

#### 5.1 各尺度の因子分析

元の見捨てられ不安尺度は第一因子注目・承認欲求と第二因子過剰な自己犠牲の2因子で構成されている。しかし、今回の因子分析の結果では1因子構造が適切であるという結果となった。尺度項目を検討してみると、因子分析の結果から導き出された8項目のうち、過剰な自己犠牲の7項目が全部見出され、注目・承認欲求からは、『自分の振る舞いが友人から変に思われないうか、気にしている』の1項目のみであった。これは、注目・承認欲求の8項目のうち携帯電話に関する次の3項目『気がかりなことがあると、誰かに気づいてほしくてブログやメールに自分の気持ちを書いて公表する』『メールの返信が来ないと不安になり、何度も相手に問い合わせをする』『相手の気を引くために、何度も電話をして着信履歴を残す』が注目・承認欲求因子であり、それらを削除したことによって注目・承認欲求が一つの因子として成立しなくなり、1因子構造となったのではないかと考えられた。「見捨てられ不安」には重要で身近な他者(集団)

から見捨てられないための過剰な振る舞いによる注目・承認欲求があることを齋藤・吉森ら(2012)が示しているため、今後中学生にも当てはまるような質問項目の開発が望まれる。

今回、日本版Müller Anger Coping Questionnaireは、罪悪感の中に怒りの表出に対する罪悪感と関係のない2項目『嘘をつくとき良心の呵責を感じる』、『良くないことをすると心が責められる』を削除して使用した。そして、「怒り表出」の項目7『本当に頭にくると歯止めがきかなくなる』と「怒り主張」の項目21『誰かに腹を立てた時にその場にふさわしい表現ができる』という項目が除かれた。結果、元の日本版Müller Anger Coping Questionnaireのうち4項目が除かれたが、怒りの対処に関する4方略が測定できる点は原尺度の利点を引き継いでいると考えられた。

「社会志向性N」は、元の因子と同じ全7項目の1因子構造となった。

親密性尺度は、『相手の欲求を満たすことで、自分が満足できるような人がある』と『他人に自分の心を打ち明けると、自分がのみこまれそうに感じる』が除かれた。全10項目のうち2項目が除かれたが、同じ1因子構造となった。

## 5.2 学年による差の検討

「見捨てられ不安」、「社会志向性N」、「親密性」、怒り対処のそれぞれが、学年間で違いがないか分散分析と多重比較を行った結果、「見捨てられ不安」と怒りの対処における「怒り表出」において3年生が2年生より有意に高い結果となった。「見捨てられ不安」が2年生よりも3年生の方が高いということは、3年生はまさに第二の分離固体化期の真只中であり、親からの自立を考え始めている時期である。自分は何者であるかということで悩み、将来の進路選択に向けて苦悩していることが自分自身と対人関係の不安の増大に関連していると考えられる。荒木田・青柳ら(2003)の中学生の精神健康状態とその要因の中で認知されたストレスに関する論文では、「日常のささいな混乱と自分自身に関する悩みが2年次から3年次間で上昇し、ストレスは学年進行と共に上昇した。特に自分自身の悩みに関するものが3年生で男女とも上昇していた。これは自分自身の悩みの中に『自分の将来について悩んだ』『自分の学校の成績について悩んだ』『大きな決心をしなくてはならなかった』という質問項目が含まれており、中学3年生で受験、進学先を決定しなくてはならないことの影響と考えられる」と述べている。また、中学3年生は、上記のため、ストレスが高まり、そのストレスが「怒り表出」に少なからず影響を与えていることが考えられる。「社会志向性N」に関しては、2年生よりも1年生、1年生よりも3年生の方が有意に高い結果となった。2年生よりも1年生の方が高いということは、1年生は中学校という社会に出て対人関係や学校の環境等に不安を感じているが、2年生はその環境に慣れてきたと考えられる。それが、3年生になると、対人関係の不安や将来の不安が高まったため今度は増大したと考えられる。

## 5.3 尺度間の相関

「見捨てられ不安」と「社会志向性N」との間には有意な中程度の正の相関関係( $r = .55, p < .01$ )が示された。「見捨てられ不安」が強いと自分の存在価値を否定的に捉える考え方となり、自分

に自信が持てず、何かあると自分の振る舞いがまわりから嫌われているのではないかと、自分が原因ではないかと不安になり、他人からどう思われているかを気にして自分を殺して相手に合わせてしまう関係につながっていくことが想像できる。

次に、「見捨てられ不安」と「親密性」の間には有意な弱い負の相関関係 ( $r = -.23, p < .01$ ) が示され、「社会志向性N」も「親密性」との間には有意な弱い負の相関関係 ( $r = -.28, p < .01$ ) が示された。Erikson (1959, 1968) によれば、親密性を形成するにあたってはお互いの欲求を満足させることができるような関係性が重要であると述べている。しかし、「見捨てられ不安」が強いと自他に対する不信感が強くなり、親密な関係を回避しようとするためと考えられた。「社会志向性N」が高いと未熟で一方的な依存や自分を殺してまで相手に合わせてしまう過剰適応になることを考えると、この場合は親密性を形成するお互いの欲求を満足させ合うことができるような関係にはならないと考えられる。

「見捨てられ不安」と「怒り抑制」とは、有意な弱い正の相関関係 ( $r = .22, p < .01$ ) が、同様に「怒り罪悪感」とも有意な弱い正の相関関係 ( $r = .21, p < .01$ ) が示された。「見捨てられ不安」が高いと、嫌われたくないと思うがゆえに怒りを抑えたり、怒りの表出が恥ずかしいことだと思って罪悪感が高まったりしたのではないかということが考えられる。

怒りの対処と社会志向性の否定的側面との関連については、「怒り抑制」と「社会志向性N」に有意な相関がなかった ( $r = .09$ )。木野 (2004) は、大学生を対象に「怒り抑制」は「社会志向性N」に中程度の正の相関関係 ( $r = .41, p < .001$ ) があることを明らかにしている。今回の結果は中学生の特徴が出ている可能性があるため、今後の研究の進展を待ちたい。「怒り罪悪感」と「社会志向性N」も相関があるとまではいかなかった ( $r = .15, p < .01$ )。怒りを表出したことに罪悪感を感じることは、何かあると自分のせいだと考えてしまったり、人に合わせて見せかけの自分をつくったりするということとは関連がない可能性があると思われた。「見捨てられ不安」と「社会志向性N」には有意な中程度の正の相関があり、この二つは「親密性」に同じように有意な弱い負の相関があった。そして「見捨てられ不安」と「怒り抑制」、「怒り罪悪感」には有意な正の弱い相関があるが、「社会志向性N」と怒りの対処には有意な相関がなかった。これは「見捨てられ不安」は怒りと関連があるが、「社会志向性N」は怒りとはあまり関連がないということである。また、「怒り罪悪感」は「怒り表出」と「怒り抑制」にそれぞれ有意な正の弱い相関を示した。怒りの表出に対する罪悪感が高まった場合、怒りを表出したことを後悔し、怒りの表出を抑制する可能性が考えられる。また、「怒り主張」は「怒り表出」との間には有意な正の相関があり、「怒り抑制」とは負の相関があることがわかった。そして「怒り表出」と「怒り抑制」には相関がなかった。このことから、思春期にある中学生においては、怒りを主張する人は怒りを表出し、怒りを感じてもそれを抑制しなければならないとは思っていないと考えられる。この点に怒りの対処に関する思春期の特徴が表れている可能性が考えられた。また、「見捨てられ不安」は、「怒り抑制」と「怒り罪悪感」に有意な弱い正の相関がみられた。これは、「見捨てられ不安」は怒りの抑制や罪悪感というあまり適応的ではない怒りの対処と関連するとい

うことであると思われる。

最後に、「怒り表出」、「怒り罪悪感」、「怒り抑制」、「怒り主張」と「親密性」は、いずれも相関はなかった。怒りの対処の仕方と親密性に関連はないということである。中学生の親密性には怒り以外の要素が関連しているということが考えられる。

#### 5.4 共分散構造分析による因果モデル

パス解析の結果、「見捨てられ不安」が「親密性」に与える影響について、直接的な有意な負のパスと同程度の社会志向性の否定的側面が介する形での有意な負のパスが存在することが判明した。ゆえに「見捨てられ不安」があると相手のことを気にしてしまい親密な関係を作りにくい面もあることが示唆された。これは今回の新しい知見である。中学生においては、まだ自己がしっかりと確立しておらず、他者と自分との間で葛藤し、相手に飲み込まれてしまう不安定な位置付けは起こりうることであろう。「見捨てられ不安」の強い人は何かあると自分の振る舞いがまわりから嫌われているのではないか、自分が原因ではないかと不安になり自分の存在を否定的に認知する。また、自分に自信がなく、自分を否定的に捉えてしまい、自分を殺して相手に合わせてしまう関係を作りやすく、Eriksonのいう互いの欲求を認め合い、相互に欲求を満足させられるような関係性を築くことができず、親密な関係を回避してしまうのではないかと考えられる。「見捨てられ不安」が強い場合は、自分の存在を否定的に認知しているが、これは本人の思い込みによる認知の歪みの可能性があるので、この歪みを改善するように援助することが親密な対人関係を構築することに繋がると考えられる。

次に、「見捨てられ不安」から「怒り罪悪感」を介して「親密性」に至る有意な正のパスが存在した。怒りの表出、抑制、罪悪感には「親密性」に良い影響を与えず、怒りを主張することが「親密性」に肯定的な影響を与えると予想していたが、結果からは、「怒りの表出」、「怒り抑制」、「怒り主張」は「親密性」への影響はなく、「怒り罪悪感」のみが「親密性」に正の影響を与える可能性があるという結果となった。「怒り罪悪感」と「親密性」との関連については、相関分析の結果では相関がなかったことから慎重に検討しなければならないが、「怒り罪悪感」から見捨てられないような対処を行い、それが「親密性」につながったのではないかと考えられる。「怒り罪悪感」が強い場合、腹を立てても嫌われないように怒りを抑えて本当の自分を出せない友人関係とは違う、より親密な友人関係を構築できるような対処を行っている可能性があると考えられた。そのため怒りを表出したのち、その罪悪感をどのようにして親密な対人関係を構築することに繋げるのかを一緒に考える援助を行うことが有効と考えられた。

#### 5.5 今後の課題

今回、「見捨てられ不安」が直接的あるいは怒りの対処や社会志向性の否定的側面を介して親密性に影響を及ぼすという結果となったが、このモデルの「親密性」に対する説明率は10%に留まった。この結果から、怒りの対処や社会志向性の否定的側面以外のものも親密性に影響していると考えられる。例えば、自己肯定感の低さは、親密性に影響を及ぼしている可能性があ

るので、今後検討する必要性があると思われる。

さらに、「見捨てられ不安」が「怒り主張」以外の怒りの対処に影響を与えるということが本研究で明らかになった。これは第二の分離固体化期が招く「見捨てられ不安」は不安定な思春期心性と共に適切な怒りの主張が行われず、怒りを表出したり、抑制したり、罪悪感を抱くことに繋がるということになる。この「見捨てられ不安」からの怒りの対処は親密性以外のどのようなことに影響を与えているのか検討する必要もあると思われる。

また本研究では、対象者のうち男子中学生が少なかったため、性差を検討することができなかった。男子中学生は女子中学生と比較すると怒り表出が多く、調査結果も異なる可能性があると考えられるので、今後は男女のバランスのとれた対象者で性差を踏まえた検討を行うことが必要であると考ええる。

## 付記

本調査を実施するにあたり、調査にご協力してくださいました中学校3校の校長先生、ならびに教職員の方々、そして何より、調査にご協力くださいました中学校3校の生徒の皆様とその保護者の方々に心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- 荒木田美香子・青柳美樹・高橋佐和子・金森雅夫(2003). 中学生の精神的健康状態とその要因に関する検討 ―第一報3年間の縦断調査― 小児保健研究, 62(6), 667-679.
- Blos, P. (1962) *On Adolescent: A Psychoanalytic Interpretation*. New York: Free-Press, (野沢栄司(訳)(1971) 青年期の精神医学 誠信書房)
- Bowlby, J. (1969) *Attachment and loss. Vol.1. Attachment*. London: The Hogarth Press, (黒田実郎, 大羽華, 岡田洋子他(訳)(2007). 母子関係の理論 新版1愛着行動 岩崎学術出版社).
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W.Norton & Company, (小此木啓吾(訳編)(1993) 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W.W.Norton & Company, (岩瀬庸理(訳)(1993). アイデンティティ 金沢文庫)
- 伊藤美奈子(1993). 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, 41, 293-301.
- 伊藤美奈子(1995). 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, 13, 39-47.
- 木野和代(2004). 怒り反応傾向と精神的健康および個人内要因との関連 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 51, 197-205.
- Masterson, J. F. (1972). *Treatment of the borderline adolescent*. Wiley-Interscience, New York, (成田義弘・笠原嘉(訳)(1978). 青年期境界例の治療, 金剛出版)
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・宇津木成介・山崎勝之・大芦治・坂井明子・西信雄・松島由美子・嶋田洋徳・安藤明人(2000). 日本版Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討 感情心理研究, 7(1), 13-24.
- 斎藤富由起・吉森丹衣子・守谷賢二・吉田梨乃・小野淳(2012). 青年期における見捨てられ不安尺度開発の試み その1—社会構造の変化を重視して— 千里金蘭大学紀要, 9, 13-20.
- 佐々木裕子・小川俊樹(1994). 見捨てられ抑うつ尺度の作成とその検討 Tsukuba Psychological

Research, 16, 243-254.

柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における自己表明と他者表明を望む気持ちの心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.

塩見邦雄 (2000). 社会性の形成と発達 塩見邦雄 (編著) 社会性の心理学 ナカニシヤ出版3-20.

谷冬彦・原田新 (2011). 新たな親密性尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5 (1), 1-7.